

(第3種郵便物認可)

2022年(令和4年)3月23日(水曜日)

頁

頁

頁

イチゴ狩りを楽しむ親子連れ。小川さん(左)らが案内や苗作りを担う(草津市で)



パンやお菓子づくりをする利用者(近江八幡市で)



2 福祉作業所に助成

読売光と愛生き生きチャレンジ

読売光と愛の事業団がコロナ禍に直面する福祉作業所の活動を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先に、県内からは「おうみや」(近江八幡市)と、「みどりの風」(東近江市)が選ばれた。いずれも「食」に関する事業で障害者の社会参加の場を充実させようと張り切っている。

ドライフルーツに挑戦

みどりの風 大型冷凍庫購入

「4品種のイチゴがあり、蒲生地区でもイチゴとブドウの農園を営むほか、県庁内では喫茶店を運営し、知的障害者ら計20人弱が働く。果物の生産で悩ましいのは、一番おいしい時期に全てが売れるとは限らないことだ。そこで、草津市でのハウス運営から今春限りで離れ、生産拠点を蒲生に集約するのに合わせ、新たにドライフルーツ作りに取り組みことにした。マイナス40度に凍らせ、真空下で水分を飛ばす「フリーズドライ」で、丹精したイチゴやブドウの旬の風味をそのままとどめ、その作業に通年で取り組むため、果実保存用の大型冷凍庫の購入に80万円の助成が決まった。

フルーツはまず県庁内の喫茶店で提供し、販路拡大を目指す。運営するNPO法人「A.J.A」の富田邦雄理事長は「琵琶湖由来の雄肥で出来たフリーズドライフルーツをアピールし、工賃のアップにつなげた」と意気込む。

おいしいお菓子届ける

おうみや オープン買い替え

「おうみや」は、福祉法人きぬがさ福祉会の別の事業所が手がけていた。パンやお菓子の製造・販売事業を独立させる形で、2010年4月に開業した。「心を込めて作る」という思いで名付けた「工房 はあと」で働くのは、20〜60歳代の23人。材料を量ったり、生地を延ばしたり、接客が得意な人は訪問販売にも携わっている。

新型コロナウイルスの影響で、バザーやイベントの中止が相次ぎ、売り上げは1割以上減った。働く人たちの工賃も大きく減るなど悩みは尽きない。厳しい運営を強いられる中、今回、新しいコロナウイルスの影響で、バザーやイベントの中止が相次ぎ、売り上げは1割以上減った。働く人たちの工賃も大きく減るなど悩みは尽きない。厳しい運営を強いられる中、今回、

「おうみや」は、15年以上使いつづけてきた古い古びてきた。最近は温度が安定せず、職員が5分おきにチェックするなど手間がかかる。焼きムラができるのも心配だった。

新しいコロナウイルスの影響で、バザーやイベントの中止が相次ぎ、売り上げは1割以上減った。働く人たちの工賃も大きく減るなど悩みは尽きない。厳しい運営を強いられる中、今回、

オープンに買替えて80万円の助成を受けることが決まった。

「コロナ禍にあっても、工房では「おいしいお菓子を届けるためにがんばろう」という声が続かないという。瀬川正樹施設長は「オープンの新調で、レストランや喫茶店にお菓子を御すことができるようになり、利用者みんなの励みになる。メンバーの前向きな気持ちを大切に、地域のみなさんに喜んでもらえる製品づくりに一層力を注ぎたい」と喜んでいる。

2022年3月23日（水）

（第3種郵便物認可）

「かしの木学園」に助成

生き生きチャレンジ 小皿「カワラケ」製作



読売光と愛の事業団が、福祉作業所で働く人たちの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先に、府内から「かしの木学園」（中京区）が選ばれた。

今年度は、新型コロナ禍で経営に苦しむ作業所を対象に公募。財源には全国コロナ医療福祉支援基金への募金を充てた。

「かしの木学園」は1970年4月に開所。現在は18〜86歳の55人が利用しており、手作りパン製作や観光土産の菓子箱作りなどに取り組んできた。

現在の主な作業は、寺社などで厄よけなどの願を掛けて投げる直径約6センチの素焼きの小皿「カワラケ」の製作。作業所内のろくろで粘土を成形し、「甘露」「吉祥」などの文字を入れて電気窯で焼成する。

ろくろでカワラケ作りに励む利用者ら（中京区で）

2022.3.23

して、日収700〜800枚成形してきたが、ろくろの老朽化にコロナ禍が追い打ちをかけ、2020年の収入は前年比で8割減という月もあったという。

一方、昨秋頃から、今後を見据えた受注が増えてきており、稼働率を上げて増産に踏み切ることが考慮され、ろくろの購入費として50万円の助成を受けた。

滝沢一人学園長（57）は「ろくろが1台増えることで、半日で240枚の増産が見込める。作業でできる利用者も増え、若手育成にもつながる」と喜んでいる。

	南部	北部
	やや多い	やや多い
きょう		
24日(木)		
25日(金)		

堺の事業所に助成金

焼き菓子障害者が手作り

の助成が決まった。

◇

「青い鳥」は2003年10月に開所し、現在は8人の利用者がパティシエの指導を受けながら本格的な焼き菓子作りに励んでいる。

一押しは米粉で作ったシフォンケーキ。もっちりとした食感が癖になる一方、甘さは控えめ。生地作りから袋詰めまで、利用者が手作業で行っている。

コロナ禍で福祉関係のバザーが中止され、売り上げが減少。百貨店などに出向いて販売をするようになり、利用者たちの働く意欲にもつながっている。

一方で、製菓店などがライバルになるため、品質の向上や製造量の拡大が欠かせない。手作業では限界があるため、助成金で大型のミキサーを購入し、作業効率を上げていきたいという。

生活指導員の中谷容子さん(34)は「最終的にはブランド化し、味で勝負できる商品を育てたい」と意気込む。

生き生きチャレンジ

読売光と愛の事業団が、障害者が働く福祉事業所を支援する「生き生きチャレンジ」事業で、府内から今年度は堺市東区の就労継続支援B型事業所「青い鳥」に、製菓用ミキサー購入費として46万円が贈られた。

「全国コロナ医療福祉支援基金」への募金が原資で、今年度はコロナ禍で売り上げが減少して経営に苦しむ福祉事業所が対象。全国の18作業所に計1000万円



菓子作りに励む利用者たち(堺市で)

障害者のレストラン助成

光と愛の事業団 香芝「すみれの里」へ

読売光と愛の事業団が、福祉作業所に対して支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先に、県内からは、香芝市逢坂の障害者支援センター「すみれの里」が選ばれた。

すみれの里は2013年に開所。知的障害者らに就労継続支援や生活介護の支援事業を行っている。農業のほか、新聞、廃油の回収など活動の幅は広く、約30人が活動している。

18年には、香芝市藤山の「ふ

たかみ文化センター」の中にレストラン「ふれあいキッチンSORA」をオープン。6人の施設利用者が、火く土曜の週5日で調理や接客に従事する。コロナ禍で来客数が減ったが、唐揚げやとんかつなどの弁当販売に力を入れている。

助成金は、電気フライヤーの買い替えに充てられる。スタッフの石田晶香さん(41)は「今後も、地域の人々に喜んでもらえるような料理を提供したい」と話した。



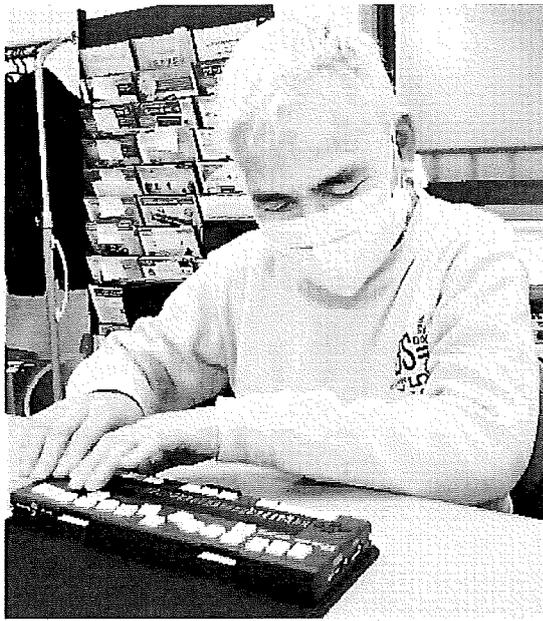
「ふれあいキッチンSORA」で働く施設利用者ら(香芝市で)

障害者就労2施設に助成

福祉作業所で働く人たちの自立を支援する、読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先が決まった。県内からは「北九州視覚障害者就労支援センターあいず」（北九州市戸畑区）と、「宗像コスモス会共同作業所」（宗像市）が選ばれ、それぞれに40万円、19万円が贈られた。

読売光と愛「生き生きチャレンジ」

「北九州視覚障害者就労支援センターあいず」は、視覚障害のある人の社会参加を目的に2005年に開設され、現在は23人が利用している。一般就労が可能な人はあん



助成金で購入した「点字ディスプレイ」を操作するセンター利用者

北九州視覚障害者施設「あいず」点字ディスプレイ購入

摩マッサーシ指圧師やはり師、きゆう師の資格取得や、事務職に必要なパソコン技術の習得を目指して技術指導を受け、訓練に励む。

一般就労が困難な人は市発注の点訳作業を請け負ったり、点字用紙を再利用して製作したバッグや封筒などを地域のバザーで販売したりしている。対価を得る一方、地域住民らとの交流も重ねる。

今回の助成金で、センターは「点字ディスプレイ」を購入した。パソコン画面の文字を点字に変換し、指で触って読むことができ、点訳作業などに活用する。電子手帳のような使い方も可能なため、日常的に使える便利な機器として利用者に広く紹介している。

センターの山田裕司所長（68）は「新型コロナウイルスの影響でセンターの運営は厳しい。助成は本当にありがたい」と感謝した。

宗像コスモス会共同作業所

新製品開発へ意欲



指導員(中央)から助言を受けながら革細工に取り組む利用者(左)

宗像コスモス会共同作業所は2009年に開設された。利用するのは精神障害のある20〜25人。自主製品のせつけんと米粉ケーキを主力に製造し、箱折りやシール貼り、図書の集配なども請け負っている。

新型コロナウイルスの影響でバザーなどの販売機会を失った。このため、収益が大幅に落ち込んでおり、今回の助成金は器具・工具類の購入に充てる。作業の効率や安全性の向上、新製品の開発につなげ、収益増を図りたい考えだ。

例えば、革の裁断器具と、様々な形の抜き型を購入し、オリジナルの革製品開発を進める。これまでトヨタ自動車九州（宮若市）の発注で車の革シート用の端材を使ったコースターを製作してきており、培った技術を活用する。新製品はキーホルダーなどの小物を想定。トヨタからは材料提供の申し出も受けているという。

作業所の篠原久美子・施設長（60）は「助成によって作業の幅が広がる。利用者の達成感や新たな趣味につなげていきたい」と話している。

(第3種郵便物認可)

2022年(令和4年)3月15日(火曜日)

三頁

日田の福祉作業所に助成

光と愛の事業団 車両購入費に



法人職員と一緒にパンづくりに励む利用者ら（日田市のびいたあパンの家で）

障害者が働く福祉作業所を応援する、読売光と愛の事業団の生き生きチャレンジ助成事業に、県内では日田市石井の社会福祉法人「びいたあパンの家」が選ばれた。助成金は80万円で、訪問販売用の軽ワゴン車購入費の一部に充てるとい

う。今年度は新型コロナウイルス

障害者が働く福祉作業所を応援する、読売光と愛の事業団の生き生きチャレンジ助成事業に、県内では日田市石井の社会福祉法人「びいたあパンの家」が選ばれた。助成金は80万円で、訪問販売用の軽ワゴン車購入費の一部に充てるとい

障害者が働く福祉作業所を応援する、読売光と愛の事業団の生き生きチャレンジ助成事業に、県内では日田市石井の社会福祉法人「びいたあパンの家」が選ばれた。助成金は80万円で、訪問販売用の軽ワゴン車購入費の一部に充てるとい

喫茶部門での接客・販売などをしている。毎日約40種類、1000〜1200個焼き上げるパンは国内産の材料にこだわり、具材のクリームなども手作りする。こども園の給食や企業などへの訪問販売で人気だったが、コロナ禍で休園となり、企業への立ち入りも難しくなって売り上げが激減

徘徊高齢者保護 2人に感謝状

大分南署

大分市内を徘徊していた女性（80歳代）を保護したとして、大分南署は8日、市内の特別養護老人ホームで働く介護職員の立花美穂さん（46）と有田絵奈さん（20）に感謝状を贈った。

大分南署によると、2月21日午前0時頃、大分市寒田の路上で、立花さんがパジャマ姿で歩く高齢女性を保護し、交番に連れて行った。連絡を受けた有田さん

した。定期的な購入が見込める旧郡部の高齢者宅へ訪問販売を強化するため、新車両を要望した。渡辺栄子理事長（70）は「訪問販売用の車両は3台あるがいずれも古く、移動中に故障で停車すれば利用者やパニックになりかねない。新車両を有効に活用し、快適に仕事をしてほしい」と話した。

も駆けつけ、2年前の新人研修で訪れたデイサービスの利用者だと気づき、身元



感謝状を受け取る有田さん（中央）と立花さん（左）

2 福祉作業所に助成金

読売光と愛の事業団

読売光と愛の事業団が福祉作業所を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」の助成先が決まった。県内では、熊本市東区の「くまもと障害者労働センター」（通称・おれんじ村）と錦町の就労継続支援B型事業所「アート工房クレヨンの森」が選ばれた。



お弁当の販売や接客をするおれんじ村の利用者たち

アート工房クレヨンの森

業務用ミシン購入

2001年4月に開所した。特定非営利活動（NPO）法人「くれよんのもり」が運営し、人吉・球磨地域に暮らす20～50歳代の15人が利用している。

作業所では、みそやゆずこしょうの製造のほか、機織りの一種「さをり織り」を製作しているが、新型コロナウイルスの感染拡大でバザーなど地域行事が中止に。出店の場

を失い、販売の売上げが減少している。

助成金は、利用者が作ったさをり織りの布を製品化するため、業務用ミシンの購入に充てた。施設には家庭用ミシン1台しかなかったため、遠山竜太施設長(45)は「より丈夫で高品質な製品が作れる。売上げを伸ばし、実り多い生活につなげたい」と話している。



さをり織りを作る「アート工房クレヨンの森」の利用者

おれんじ村 レトルト製造に挑戦

特別支援学校を卒業後に自立した生活を送れるよう、1985年に共同作業所として発足した。現在は19～65歳の約50人が利用し、クッキーや弁当の製造販売、カフェの運営、チラシのポスティング作業などに従事している。小中学校を中

心に人権の大切さを伝える講演会を開き、学生との交流も深めている。

助成金は、フードプリンターや真空パックロボなどの購入に充てることを予定している。プリントクッキーの製造や、レトルト商品の加工製造

に挑戦しようと考えているという。

理事兼事務長の野尻健司さん(40)は「学校と協力して校章入りのクッキーを作るなど、交流活動をさらに広げていきたいらうれしい」と期待を寄せた。